



風葬の城

内田康夫

ふうそう しろ
風葬の城

うちだ やすお
内田康夫

© Yasuo Uchida 1995



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1995年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-185899-8

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

風葬の城

内田康夫

講談社

目次

プロローグ	7
第一章 鈴政漆器工房	10
第二章 会津っばたち	36
第三章 通夜の客	68
第四章 大内宿	99
第五章 近藤勇の墓	131
第六章 野逝き山逝き	179
エピローグ	233
自作解説	238

風葬の城

プロローグ

雪江は朝から機嫌が悪い。いつもなら、浅見の朝寝坊を叱りつけるのに、次男坊の顔を見ると、口もききたくない——と言わんばかりに、さっさと自室に引き上げた。

お手伝いの須美子嬢によると、朝食のテーブルにも出てこなかったそうだ。

「どうしちゃったんだい？ おふくろ」

「歯です」

「は？……」

駄洒落みたいに問い返した。

「ええ、さし歯の具合がよくないって、いらいらなさっていらっしやいます」

「ふーん、そうなの、歯が悪いの」

二年前までは、雪江の歯はすべて自前であった。誉れ高き警察庁刑事局長である長男陽一郎とともに、それが彼女の最大の誇りであった。しかし、この二年のあいだに三本がさし歯になった。その歯と一緒に誇りまでがグラついていくのかもしれない。

人間、物を食えないのがいちばんつらい。そこへもってきて、物を言うのも億劫となる
と、二重にやる瀬ない。物言わぬは腹ふくるる心地——と言うけれど、黙っていれば満腹感
が味わえる、という意味ではないのだ。

「坊ちゃま、お見舞いに行つてさし上げてください」

須美子は優しい。

「そうだね」

目玉焼きを平らげ、トーストをパクつき、カフェオレでクシユクシユと口を濯ぐと、浅見
は席を立った。

「あ、坊ちゃま、口元にパン屑が……」

須美子はうるさい。

「分かつているよ。デザート用にとつておいたのだ」

浅見はパン屑をつまんで、食べた。

雪江の部屋を表敬訪問すると、少し気分が収まっていたのか、浅見の顔を見るなり、言っ
た。

「最近の歯医者さんはなっていないわね。むかしはほんとにお上手だったのに」

「そうですね」

「そうですとも」

「しかし、いまは医療器具は進歩したし、ポーセリンとかいった技術も進んで、入れ歯なんかも、ずいぶんいいものが作れるそうじゃありませんか」

「技術が進んでも、結局は人ですよ。若くてハンサムな先生だから、すっかり信用していたのに、まるでだめなんだもの……」

雪江は悲しそうに眉をひそめ、頬のあたりを押さえた。若くてハンサムなものと信用とが、どう結びつくのか、女性心理はいくつになっても不可解なものがある。

「そのぶんだと、平塚亭のお団子も当分、食べられませんね」

「ああ、食べ物の話はしないでちょうだい。ジレンマに陥っているのだから」
言うことが大袈裟だが、歯の痛みは他人には理解できない。

「季候もよくなってきたし、気晴らしにどこか、旅行でもしたらどうですか」

「だめですよ、こんな歯では、どこへ行ったって、楽しくもなんともありませんもの。光彦はいいわねえ、気楽で。今度は会津へ行くんですって？」

「はあ、しかし仕事ですから、気楽というわけにはいきません」

「何を言ってるの、気楽なものですよ。ほんとにあなたは、いくつになっても気楽な子だわねえ。何を考えているのか、不可解そのものですよ」

やはり歯の痛みは深刻らしい、浅見は足元の明るいうちに退散することにした。

第一章 鈴政漆器工房

1

万華楼まんげろうのおやじ——大滝老人おたきが、しきりに嘆なげいていた。次男坊が京都へ行ったきり戻ってこないのだそうだ。

「先方の娘につかまってな、会津のことは忘れそうだと。ばかなことをぬかしやがる」
娘は京都でもちよっと名のあるレストランの、三人姉妹の長女で、父親がどうしても手放さない。結婚するなら店の跡を継げと言うらしい。

「いいでねえですか、京都にやってしまったら」

安達武春あだちたけはるは無責任に言った。

「そうはいくかい。こっちにだって、いろいろ都合がある。早い話、人手が足りなくて困っているのによ」

「ははは、それならおやじさん、京都さ行って、首に縄つけて引っ張ってくるだね」

「そんなみっともねえことは出来ねえ。痩せても枯れても会津っぽだでな」

そういえば、大滝老人は近頃、とみに痩せた。隠居して、長男に店を任せたのはいいが、あれこれどこかしいばかりで、かえってシンが疲れると愚痴をこぼしている。

時にはつらいこともあるけれど、人間、現役で働いているうちが花なのかもしれない——と武春は思う。

「倅せがれのやつ、どうせ目を付けるのだから、武さんのところの娘さんだら、めんこいし、家も近くてよかったがなあ」

「あはは、うちのは小難こむずかしい堅かたいことばかり言っつて、まだガキみてえなもんだ。当分、その気にはなんねえみてえですよ」

「そうでねえだよ武さん。いつまでもこどもだと思ったら大間違いだ。親父さんの知らねえうちに、ちゃんんと男がいたりすっかもしんねえ」

こっちの気になることを言うだけ言っつて、万華楼のおやじは引き揚げた。

午前中、最後の客が観光バスで着いて、見学コースを回っている。

鈴政漆器すずまさしつき工房は工場と展示即売場とが繋がつながっていて、見学コースから、お客をそのまま売り場へと直行させる仕組みだ。

工場といっても、所詮しよせんは手仕事の零細な仕事場だ。流れ作業というわけにはいかない。ひ

と部屋ひと部屋、工程の順番に区割りがあつて、それぞれの職人がそれぞれの部屋で働いている。漆うるしの仕事はゴミや埃ほこりを嫌うから、部屋は窓もドアも閉めつきりだ。

漆器の工程は、木地きじづくりは別にして、下地、中塗り、上塗り——と、大まかに分けて三段階ある。こう書くとは簡単そうだが、たとえば「本堅地ほんかたじ」とよばれるものは、三十三工程から四十二工程まで、複雑微妙な手順がある。

量産品の比較的安価なものでも、下地から上塗りまで、しっかりおさえるべきところはおさえおかないと、使っていて、じきに剥はがれを起こしたりする。

下地は、錆漆さびうるしや地の粉漆こううるしを塗り込んで、乾燥させて、空研からとぎで余分な地の粉漆を取り除き——といった作業を何度も繰り返し、木地の表面を平坦にしたり、長い年月使っても、木地が痩せたりしないようにする。

その次に中塗りの工程があつて、上質の漆を使用して下地をより均質に仕上げ、ようやく上塗りの工程に入つてゆく。

漆器づくりの作業は、下地塗りから中塗りまでの工程に、手間も技術も要求されるといってもいい。どれも、完成品の外観では見えない部分である。

素人から見ると、単調で気の遠くなるような作業だ。もちろん漆が相手の仕事で、慣れない者やアレルギー体質だとカブレることもある。板敷きの床に座布団を敷いて、日がな作業台に向かう——という作業条件も劣悪。3Kを地でゆくような職種だから、どうしても若い

人材に敬遠されがちで、どこの漆器工場でも後継者難に頭を抱えている。

漆器づくりも、中塗りまでを終えた素材に上塗りや絵付けをするような段階になると、さまざまな技法が駆使され、高度で繊細な技術も要求される。

立塗たてぬりと呼ばれる、研ぎや磨きみがを行わないで、乾燥すれば出来上がり——という塗りでも、艶つやのあるもの、艶を消したものなど、その地方ごとに伝承された、独自のものがある。花塗、春慶塗しゅんけいなどがそれで、塗りそのものが勝負だけに、埃やムラのないように細心の気配りが要求される。

上塗りを研磨して下塗りを見せる技法は、漆器の独壇場とでもいうものだ。曙塗あけぼの、夜桜塗などがそれである。

そして絵付け、加飾かしよくが漆器技法の頂点ということになる。漆芸の魅力は加飾に要約されるといってもいい。蒔絵まきえ、沈金ちんきん、螺鈿らでん……等々、加飾の技法は複雑精緻を極める。ことに蒔絵は日本独自のものといわれ、平蒔絵ひらまきえ、研出蒔絵とぎだし、梨地なしじなど、その種類も十以上におよぶ。

漆器づくりも、絵付けや加飾となれば、どこことなく芸術家ふうでかつこいいが、それに携たずさわるのは、ごく一部の、才能ある者に限られる。芸術的センスや少なくとも絵心がなければ務まらない。下地・中塗りと上塗りのあいだには、同じ漆職人でも一線画されているのである。

安達武春は漆器職人として四十年近い年季が入っているけれど、上塗りの仕事は、無地の

立塗など、ごく簡単なもの以外は手を出さない。

上塗り職人——ことに絵付けや加飾のできる者は収入もよく、仕事場も上等だ。その上に才能があり、運もよければ、ひょっとすると展覧会で入賞して工芸作家として飛躍するチャンスもある。

鈴政漆器工房にも二人、上塗り・加飾の専門職人がいる。二人ともまだ四十代だが、それぞれ和風の部屋を与えられ、厚遇されている。

会津漆器には「会津絵」と呼ばれる、伝統的な塗りの技法・デザインがあつて、現在でもその伝統は踏襲されているけれど、それとはべつに、各メーカーは独自のデザインを研究し、新しい会津漆器の方向を模索発表しつづけている。そのための戦力としても、上塗り・加飾職人は重要な地位にあるといつていい。

それに較べて、武春のような下地職人は、いくら年季が入つていても、待遇はなかなかよくならない。給料など、一般のサラリーマンと比較すると、信じられないほど低い。よほど、この仕事が好きか、収入に無頓着か、諦めあきらめがいいか、それとも天職と信じて使命感を抱いているかしないかぎり、魅力に欠ける職種であることはたしかだろう。

武春には、この条件のすべてが当てはまるといっていい。ことに、最後の「天職」に関しては、金科玉条のように思い込みが強い。誰かがやらねば、会津漆器の明日はない——と、いつも思っている。

いや、事実そのとおりなのだ。もっとも地味で、もっとも魅力に欠ける下地塗りの仕事こそが、じつは漆器のいのちなのである。出来上がりの美麗さや見栄えだけで、値打ちが決まってしまうような近頃の風潮は、会津漆器の本質からいえば、あまり喜ばしいことではない。

会津漆器の本来は飾り物や嗜好品しこうひんなどではない。家庭の食卓で、台所で、日常雑器としてぞんぶんに使われてこそ、漆器は値打ちがある。それには、乱暴な扱いにも耐えるだけの強さがなければならぬ。その強さや耐久性を支えるのが下地塗りなのだ。

だが、その下地塗り職人が報われない。いや、漆器職人にかぎらず、いまの世の中、おしなべて、下地づくりに勤いそしむ者の報われない時代である。

隣の部屋で、やはり下地塗りの作業に専念している平野浩司ひらのこうじの息子の洋一が、東京に出て歯科技工士になった。

「洋一にしてみれば、親父の人生を見ていて、漆器職人として会津の地に埋もれてしまうのがつまらねえと思えたんだべな」

平野はそう言っている。

「だけれど、洋一の話だと、歯科技工士の仕事も似たり寄ったりだそうだ」

歯科治療の重要な部分——つまり、入れ歯を作る作業のほとんどは技工士が受け持つのだが、収入はもちろん、地位も名誉も、おいしいところはすべて歯科医が取って、技工士の収